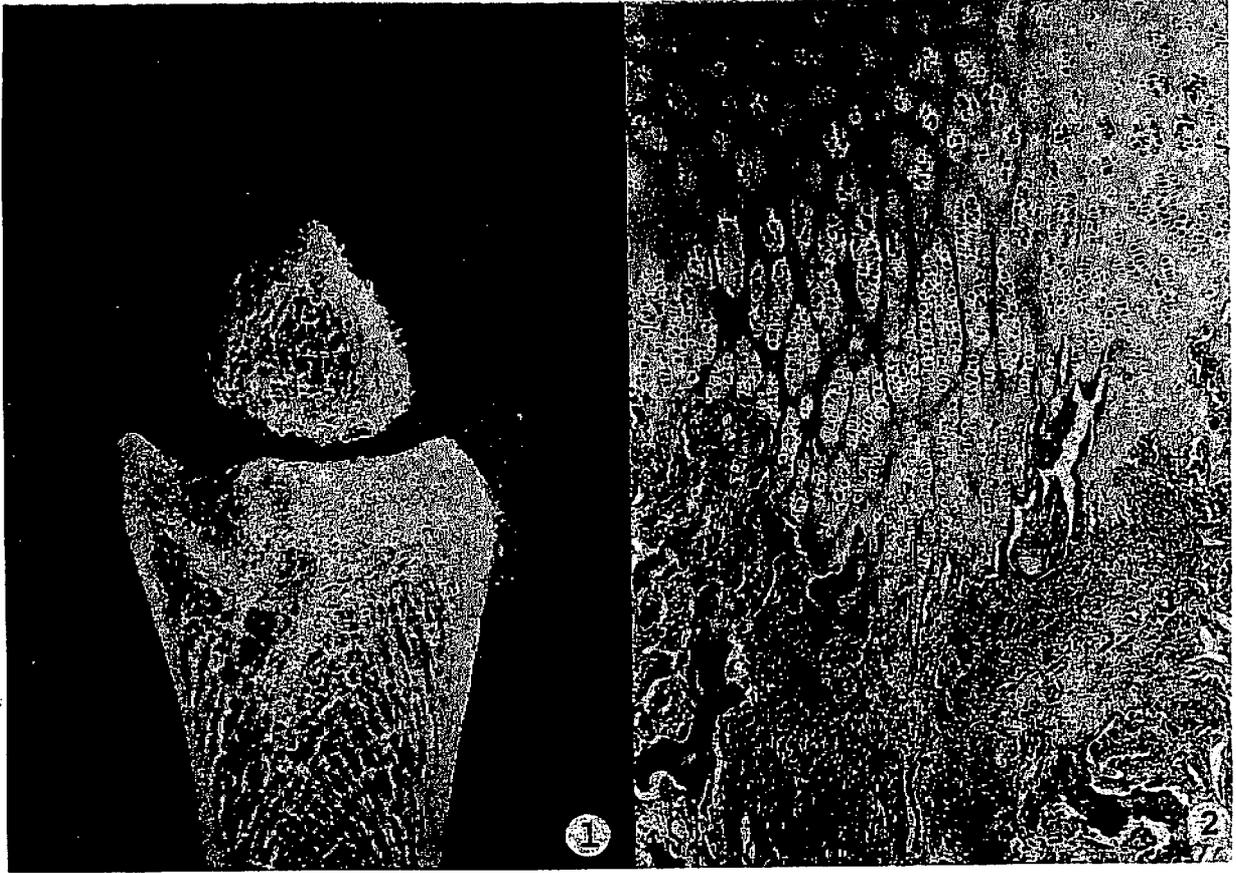


馬の肋骨における肋軟骨接合部

競走馬総合研究所馬事第三研究室出題 第18回獣医病理学研修会標本 No.277



症例並びに主要臨床像：サラブレッド種，3歳2ヵ月齢の北海道産，繋養地東京。該馬は1974年11月北海道より競走用馬として本会宇都宮育成牧場に入厩し，特別異常なく繋養されていた。しかし，育成及び調教過程が進むにつれ，乗り運動等の運動負荷直後，左前肢の軽度な慢性支跛を示すようになった。その後，症状の好転をみないまま1976年9月日競研に移動し研究馬となった。以後，しばしば左中手指節関節（球節）に熱感を認めた（サーモビジョン検査）。また，心電図検査では洞性不整脈がみられた。1977年4月28日電撃後直ちに放血致死とし，剖検に供した。

肉眼並びにX線像：

(1)肋骨：左右第8ないし第10肋骨の領域における肋軟骨接合部はやや腫大し，この接合部の肋骨内側面は外側面に比べ，やや膨隆し，凹凸が目立った。左第9肋骨の肋軟骨接合部の縦断面では肋軟骨内側部分の肋硬骨組織内に不整形，境界明瞭な灰黄色病巣（0.6×1.0cm）がみられた。更に，この病巣内には暗赤褐色やや硬度を欠く限局性の米粒大病巣2個を容れていた。この肉眼的限局病巣は，X線学的に軟X線で，肋軟骨接合部の成長帯及び骨組織の限局性消失像がみられた（Fig. 1）。

(2)その他：左中手指節関節の慢性関節炎及び基節骨種

子骨並びに第3中手骨遠位関節面の糜爛。第3及び第4頸椎関節の慢性椎間関節症。左鎖骨腱条部における拇指頭大の結合織増生からなる硬結巢形成。

組織像（左第9肋骨）：主な組織所見は肋軟骨接合部における限局性変性・壊死巢形成，該部限局巢に対する反応性変化として巨細胞を混じえる線維化及び新生骨梁形成，並びに成長帯における層状軟骨細胞配列の不整或は部分的消失であった（Fig. 2×51.4）。この変性・壊死巢は，概して成長帯の骨幹側（毛細血管侵入層側）に巢状或は散在性に形成され，時折り肋軟骨及び成長帯中心部にも見られた。この部の成長帯は長さ・幅を増し，主として成熟軟骨細胞及び肥大軟骨細胞よりなっていた。また，基質は増量しているように見え，増量した軟骨基質は時折り散在性巢状水腫性膨化並びに粗鬆化を示した。また，軟骨基質は膠原線維の増殖・変性が指摘された。更に，変性・壊死病巣付近における小動脈は壁の硬化性変化，粗鬆化並びに管腔の狭小化等の変化がみられた。このことは上述した病変の成り立ちに乏血性の影響などの局所循環障害が関係していたかもしれない。

組織学的診断：ウマの肋軟骨接合部成長帯における変性・壊死。